

深イ～話！

No.101

——「母親の一念」——

(山本英照住職 福岡県 天徳山 金剛寺)

ある日、ひとりの女性が、灰色の顔をして当寺においでになりました。

「私、胃ガンなんです。スキルスと言われました」

スキルス胃ガンはもっとも治療が難しく、再発性も高い悪性の胃ガンです。

「あなた、スキルスというが、意味わかって言ってるかね……あとどのくらいと、言われたんですか」

「わかっています。あと半年と言われました」

「それで今日は、どういったご相談でしょうか」

「私の命を延ばしてください……せめて、いま小学五年の娘が中学を出るまで」

彼女は40歳でした。私と同じ年です。

私にも子供がいます。

その若さで余命を宣告された彼女の悲痛な願いに、私は胸がぐっと詰まるのを感じました。

こういう願いを受けたとき、私はいつもジレンマに苦しみます。

仏さまに願ってもどうにもならないことは、この世にはいくらでもあるんです。

救えまいと思っただけでも、病気全快の祈願をしなければならないときがあります。

そうすることによって、その人や家族の心が少しでも安らぐからです。

人は誰しも、必ず死を迎えます。

そうした定めの中で、心安らかに死を受け入れられるかどうかは、大きな課題なんですな。

彼女の闘病中、私にとっては忘れられない出来事がありました。

年に一度、御礼報謝として檀家さん方を250人ほど、佐賀の本山へと連れて行くんですが、その年に限って、現地でひどい雨となりましてね。傘が役に立たないほどの、横なぐりの風雨ですよ。

本堂から典之院までは0.5キロほどあるので、ご老人や体の悪い人はバスに乗って上り、元気な者だけ私と歩くように指示を出しました。



ところがその中に、カッパを着て、娘の手を引く彼女の姿があったんです。

「なんでバスに乗らん。倒れたらどうするとね」

私の忠告に、彼女は悲痛な顔で懇願してきました。

「歩かせてください。私が弱音を吐かん強い親の姿を娘に見せられる時間は、あとわずかしが残っていません」

彼女は半年の余命宣告から五年もの間、こうした毅然とした姿を保ち続けました。

その間、少なくとも私の前では、「つらい」「きつい」「なんで私だけが」などといった言葉を吐いたことは、ただの一度もありませんでした。

ついに、力尽きた彼女が他界したと知らせが届いたのは、年が明けた1月の晦日、肌を刺す寒い日の午後のことでした。

枕経に行くと、そこには中学3年になった娘さんがおりました。

愛娘が推薦で高校に合格したのを見届けるように、旅立っていったそうです。

彼女の最期の望みがかなったんですね。母親の一念とはすごいもんですばい。

枕経が終わると、亡くなった彼女のお母さんが、

「実は昨日のことですが、亡くなる直前、娘が『起こして』と言いまして。

無理したらいけんと言ったんですが、どうしてもと言うんで起こしましたら、私に両手をつけて『この子のことをどうかお願いします』って、言葉を振り絞るように言ったんです」

それが、最後の言葉だったそうです。

葬式が終わり、初七日の取り上げとなっても、忘れ形見の娘さんは、涙をひとつもこぼさないんですよな。

そして最後の最後に、私にこう聞いてきました。

「私のお母さん、成仏してますか」と。

「成仏しとると思うよ。だけどね。

14歳の娘を残して心安らかな旅立ちができる母親など、この世には一人もおらんのかな」

「……私もそう思います。だから私は泣きません。

母が心安まるように、これから父と二人、一生懸命に生きていきます」

母親の生き様が、娘にこのような心をもたらしたんだなあ、と私は思いました。